

# 交流深め相互活性化

私は大学院社会人博士課程で農村と都市の地域活性化に関する研究をした。地域活性のためには、農村と都市をトータルに捉える「農村と都市の共生」農都共生」が重要という結論を得た。農業を理解・応援する

林美香子 キャスター  
北海道大学客員教授

## 経済、情報、人の循環

都会の人が、農家レストラン・農業体験などで、農業・農村の持つ癒やしなどの多面的機能を楽しむ。また、農家が都会で直売所を運営するなどの活動を通して、交流や連携を重ね、農村と都市の相互理解と共感を深めていくことが、農村と都市双方の地域活性化に力を発揮する。都市住民のライフスタイルが変化し、「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人や、余暇に生活の力を置く人が増え、農業・農村への関心も高まっている。都市には楽しみや心の豊かさなどの恩恵があり、農村には生きがいや副収入をもたらすなど、双方への効果がある。癒やしや楽しみを提供してくれる農村に対して、都市住民がお金を使うことは大きな経済効果だ。疲弊する地方にお金が循環する仕組みの一つとして、グリーン・ツーリズム（農村地帯で過ごす休暇）など農都共生活動を進めたい。「経済の循環」と同時に、「情報の循環」「人材の循環」が起こり、農村・都市の双方に活力をもたらす。

消費者を増やし、国産消費を拡大するためにも、農都共生を推進したい。

コロナ禍は日本の農業にも大きな影響を与えた。コロナ対策の外出自粛により、宿泊施設・飲食店の休業や客の急減で外食向け食材の売り上げが激減。例えば生乳廃棄の危機が心配されたが、国などの牛乳消費キャンペーンに応じた消費者の購買行動により回避できた。農業を理解し、買い支える消費者がいてこそ持続可能な農業、と強く感じさせる出来事だった。

## 元気与える農村女性

全国で農村女性の起業が増えているが、女性による地産地消ビジネスは、女性の経済的自立や社会参加・健康増進・生きがい対策など、さまざまな社会課題の解決にもつながっている。例えば、北海道千歳市のファームレストラン「花茶（かちや）」は、6次産業化の成功例として評価も高い。高知県出身で農家に嫁いだ小栗美恵さんは、農業・家事・3人の育児をしながら生きがいと経済的自立を模索し、はね品の直売で現金収入を得るなど努力を続けていた。農業改良普及員から「イ

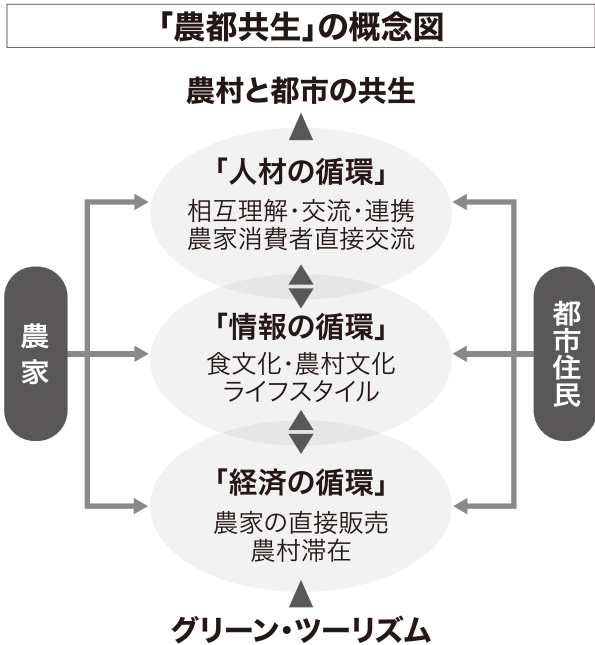
チゴ栽培は女性向き」と勧められ、1990年、40歳の時にイチゴ狩り農園を開始。「こんな農村に人が来るわけがない」という家族の大反対にもめげなかった。高知で体験したブドウ狩りの楽しさと人気がりを思い、近くの老人クラブや保育園に宣伝文を送るなど準備を進めた。結果は大盛況だった。

イチゴ狩りの期間は短いため、他の時期にも現金収入を増やそうと、ゆでトウモロコシや野菜直売なども実施。客との会話から、都会の人たちが美しい農村風景を喜んでいることに気づき、この素晴らしい資源を

活用しようと考えた。そして高付加価値商品としてアイスクリームに着目。食品加工センターで製造法を学んで独自レシピを開発し、96年にアイスクリーム店「花茶」をオープンした。小栗農場の経理もしていた美恵さんは「離農を避け、子供たちの教育費を得るためにも、農産物の加工が絶対に必要」と、家族を説得した。農産物の高付加価値化は、持続可能な農業経営のためにも重要なと感じる。2002年、有限会社として法人化し、ファームレストランも開業。後継者の子供たちと経営を継続している。美しい農園に囲まれた癒やしの場所として人気が高く、まさに農都共生の場になっている。日本の農政は長い間、農業政策中心だったが、ヨーロッパの農村政策の成功を見るにつけ、農業・農村の多面的機能を活用した農村政策の大切さを感じる。農村政策の一環として、農家レストランや直売所などにもより力を入れる必要がある。バカンスや週末に美しい農村で農都共生生活を楽しむヨーロッパ。時間をかけて高齢社会になった国々ならではの時間消費型ライフスタイルの奥の深さもあるのだろう。コロナをきっかけに地方移住やワーケーション、近隣を訪ねて楽しむマイクロツーリズムへの関心が高まった日本。今まで以上に農都共生による地域活性の推進を期待している。



はやし・みかこ 北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送アナウンサーを経てキャスターに。北海道大学で博士（工学）を取得。慶応大学大学院SDM特任教授を経て、SDM研究所顧問。著書に「農村へ出かけよう」（寿郎社）など。



6次産業化で成功した小栗美恵さん